

悩み多い教養課程



現場教授の意見

自然科学系列の場合

——マスプロといわれるものとの戦い——

山田 忠 男

考えてみると、もう二十年近い。敗戦後、空腹を抱えて京大の組合作りに歩き廻っていたとき、湯浅総長から招かれて本部アーモスト館にお訪ねしたのが昭和二十二年。こうして、全国で最初の新制大学としてその翌年四月に発足した同志社のフレッシュな陣営の一人となった筈の私も、頭髮がもう殆ど白くなつてしまつた。そして専門科目や教職の担当もしてきたが、自ら情熱を傾けた本命が一般教育。いわゆるマスプロとして最も評判の悪いものとの戦いである。今なおファイトは衰えていない積りだが……。

かの悪名噴々たる明徳館二十一番教室——しかも満員の盛況だから、ザッと千五百名、その三千の瞳を集めて、彼らの期待にも応え

私の希望も満すべく全智全能をマイクに托して悪戦苦闘。「一戦再戦して止むなかれ……」との新島先生の教えを守り、ともかくも今日まで続けてきた。少くとも壁上の Veritas liberabit vos だけは通じさせたいと心がけて。

この最悪時代を思えば、現在は講義もやりいい。新しい教育制度が根を下してきたこともある。新制大学として発足した当時のように、一時間の講義に対し一時間のディスカッションという形式（これは今でも——いやこれから益々望ましい）に戸惑つたり、やがて大量化した学生諸君を講義室に受入れかねて、弁慶のごとく大声叱咤したまま立往生した頃を想うと、今昔の感無量。ただし、そ

それは表面が安定したように見えるだけで、一皮むけば相も変わらず問題は多い。最も重大なのは、全国的な傾向。従って、自然科学系列の実態を考えるためには、このことから始めたい。

*

先ず、今までの一般教育が学生にどのように消化され、更に彼らが社会に出たからどのように役立ったかということ——すなわち、その効果の反省と評価が必要であろう。ここに教官や当局の独善性はなかったか？ これに関する調査研究は私大連盟を始めとして幾つもある。にも拘らず、そのデータに見られる楽観的な数字を私は信用しない。これがそのように安易に測り得るものではない筈だから——。

早い話が、例のプロスペクタス。新制発足当時から、一年に行わろべき講義や演習に就いての要約紹介がこの聞きなれない名の下に集められ、更に所要のものを加えてカタログとして頒布された。「教養とは何ぞや？」という命題を抱えてウロウロしていた当時の他大学にとり、これが耳目をそばでさせる企

△現場教授の意見▽

画だったことは記憶に新しい。そのカタログが大学要覧、履習要項などとの名称は変わっても、内容が実質的に現在まで続いていることは御承知の通り。ところがこのプロスペクタスなるもの、案外（または予想通り）理解どころか読まれてもいない。学生諸君がそれぞれの良き（？）先輩に指導され、出来るだけ試験や出席で楽な科目をと、々時間表でだけ選んでいる実状から眼をそらせてはいけない。もちろん、そうでない連中もあるのだが……。ともかく、このように科目の内容や一般教育（高校までにはない）の目的が無視され易いこと——この前提がなければならぬだろう。

次に制度の問題。それは基礎科目と称するヌルヌルした両生類の出現である。新制度数年もたたぬ中に、色々な呼称や単位の数え方などで脚色されながら、これが現われた。今では一般教育の協議会などで、私生児認知でもするような教育学的論議が汲々として行われているが、この中間的存在はどう考えても私には分かりにくい。基礎的な内容を持つ科目は、一般教育にも専門教育にもあり得る筈。だったら、そのどちらかに分類すればよから

う。しかるに現在では、それが設置基準にまで入れられているのだ。

もう一つ——それは大学当局なり文部省なりが期待する一般教育の効果が問題である。

一般教育に対する考え方や規定といつてもいい。直言するなら、そこでの概念たるや甚だ危うかしい。基礎科目の設定も、その一例。占領下アイフェルなどで俄か仕込みをした一般教育という薄化粧ないし厚化粧が、激動する社会の風雪二十年で手もなくハゲ去ったというのが正直なところだろう。余談だが、同様な付焼刃は文部省の私学対策にもある。

*

そこでいよいよ、本学での自然科学系列一般教育。どこにも雨は多かれ少かれ降っているが、ここは集中豪雨といったところ。上述の要素以外に、本学が自然科学学部を持たないという特殊事情を背景にして考えれば（これこそ自然科学系のガンだと信ずるのだが）、如何に被害甚大かがお分かり願えるだろう。このことは先ず講師陣の教に響く。そして設置基準に照せば当然ここにマスプロ講義が生誕することになる。そこで考えられる対策

は、講義内容からみて大人数でも可能なものと小人数でなくては不可能なものにと仕分けること。だからこうしたバラエティは従前から本学に作られている。生命科学というなら、科学的な立場で扱うか人類学でゆくか前者の例であり、後者は実験的な生化学や生物学がこれに当る（もちろん、これは講義内容や実習の方法などと関連するから、一概にはいえないが）。

困難はその双方にあるが、マスプロという言葉からの連想もあって、先ず前者の方が被害が大きい。自然科学である以上、講義実験位はなしにすませぬ。しかも学生は多数。それに就いての拙案は、かつて私大連盟の集会で紹介したし、また実行もしている。問題は大人数の学生を、どのようにして教官が掴むかという点。

幸いに、大人数とはいえ現在では冒頭に挙げたような例はない。せいぜいが七百人止まり。だからといって、一般教育の協議会で「自然科学では百人以上の学生を同時に教えること不可能」という決議があったくらい。でも私は、これを必ずしも不可能と考えない。「必ずしも」というのは、施設設備や助

手という条件を指す。前者の現況にも不十分な点はあるが、これは割合に改善された。後者に関して切角テューター制度が出来ても、大学院生を持たぬ科目では全然その御利益がない。そして私の現在も担当する人類学は、その一例なのである。フリーノート式で、聴くものに「考え」させるよう、一応の苦勞を重ねてはいるが、結局は講義中心的にならざるを得ない。

学生諸君の学問に対する情熱は向上してきた。だから、一般教育によって彼らに「考える訓練」を与える——彼らの知性を引き出すことも、比較的やりよくなったといえるだろう。設備その他も段々よくなり、教育効果も多少は向上きになったと私は考えたい。そして何よりも大切なこと——たとえ前述の諸条件に欠けてもこれさえあればという最も重要なことは、講義をするものがよき研究者であり、この生地の上に優れた絵を描くことにある。作曲が出来なくて、何の演奏家か？ のために必要な研究の問題にここで言及する要はなからう。これこそ大学の特質であり、余りにも当然過ぎるから……。ただ、自然科学部を持たないための悩みは、この点でも

極めて不利なことだけを指摘しておく（お断りするが、工学部は御承知のように技術学部なのである）。

*

——ともかくも、このようにして十八年間をマスプロといわれるものと戦ってきた。マスプロなる名は戦前にはなかったように思うが、その実例は幾つもある。私の学生時代、理学部の講義に農学部の一部が加わるものは学生数三百人を越したし、工学部や医学部に outcomes 聴く共通講義も同様。ただし誰もマスプロとはいわなかったし、問題が全然なかったといえはいい過ぎだが、本質的なものはなかったのだろう。それでも小人数に馴れた私たちは、法経の講義の盗聴にかけ遙か彼方の教壇で教授が机上と胸のマイクを使い分け、学生たちはオペラグラスを使いながらノートをしている光景に驚いたものだ。

こうした大人数講義は、欧米の一流大学でも今なお行われている、しかも自然科学や工学などで。MITのそれは有名だし、設備が旧態然たるドイツの田舎など、毎週の特定期間に劇場を借り切つて講義する例もあるという。それは驚くに当たらない。第二次大戦後の

大学教育普及は、世界的な傾向なのだから……。そしてそれは、いやでもマスプロ化を伴わずにはいない。要は講ずる者の態度と講義内容——更に受講者の心構えや準備なのである。自然科学史の小堀教授は明徳館二十一番が大好きとのこと。事実、その名講を知るものが多い。一般教育のように知識技術の注入を直接の目的としないものでは、このような成果も期待できるではないか。

*

教養課程と体育

はじめの目標

大学基準協会の決定によって、保健体育が

〈現場教授の意見〉

問題はいくらかもあるが、それは担当者自らが解決できるものも多い。むしろ根本は、大学全体の一般教育に対する姿勢や文部省の設置基準などにある。どんな見事な芝居を考え役者が揃っても、その背景やステージが悪かったら、劇評家は無論のこと、大向うを唸らせるような演出はあり得ないではないか。かくしてこの中を、私は相も変らずマスプロといわれるものと戦ってゆくのである。(6月30日)

(工学部教授・人類学)

獺 口 彰

初めて大学における教科として登場したのは昭和二十四年四月であるから、本年は数えて十八年目にあたることになる。当時、大学基

準協会に設けられた委員会の委員はドイツ流の大学理念のもとで真理探求の途を歩まれた権威ばかりであったと思う。このような構成メンバーによって保健体育を大学の正課とする画期的な問題がはかられ、比較的容易にそれが可決されたことは、今にして思えば、なにか大いなるものの導きがあったような感じがする。

昭和二十一年に日本にやってきたアメリカ教育使節団は、「健康教育と体育は教育計画全体の基礎となるべきものであり、教育計画を大学程度にまで及ぼし、諸設備を改善すべきである」との報告を残して去ったが、このような勧告を発端として、旧制大学における学生の健康管理の問題、学生スポーツのありかたなどについて反省と検討がおこなわれた。そして、大学生の健康と体育運動の必然的な結びつきが認識され、社会に出れば各方面において大きい影響力を持つ大学生の身体的適性を養い、健康生活に対する教養の水準を高めることが必要であると考えられた結果、創設期における新制大学のいろいろな悪条件を超越して、大学における保健体育の必

修という結論に達したものと考えられる。

昭和二十三年十月の大学基準協会資料第四号から大学体育のありかたをふりかえると次のようになる。「大学が企画する実技指導と学生の体育運動に対する要求とは深い関係をもつものであるから、大学における体育はどこまでも学生の自主自発活動にまたなければならぬ。そのため、学生を体力別に分け、学生に自分の体力に適した好きなスポーツを選択させて体育を実施する。更に、正課の体育のみでは十分な体育的效果を期待し難いので、一般学生に対し自由に学内においてスポーツを楽しむ得る施設を整え、且つ行事を企画する必要がある。このような正課並びに課外体育を運営し、その成果を期するためには、体育指導部、或は体育課等の組織を設け、単なる事務機関ではなく、正課体育を取扱うという教育的機能と、課外体育の管理、学生健康相談所の運営、体育会の指導援助等の行政並びに事務機能を兼ね具えた権威ある新しい機構を必要とし、且つその長は学内における幹部級の教授が当ることが望ましい。」

今日においては極めて当然であるこのような実施案も、創設当時、すなわち新制大学に

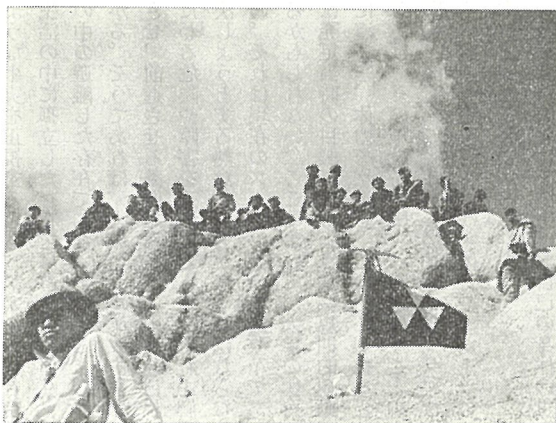
受けいれ態勢がほとんど整わない時期においては、実行の段階になって現実とのくい違いが相次いで現われてきた。大学教育機構における時間的、空間的な条件、体育の科学的知識の貧困、多数の学生と経験の浅い教員の接触、体育に対する全体的な理解の欠如などが重なったため、大学体育の運営と効果に関する疑問が常に潜在し、現場担当者も大学教育における体育科目の位置づけについて苦しまねばならなかった。しかしながら、このような悪条件のなかでも学生は旺盛な運動意欲を持っていた。狭い、暗い、通風や水はけの悪い体育施設の中で激しく躍動する学生の姿は、大学体育前進の指針としてわれわれを導いてきた。

さて、大学体育は今年で十八年目にはいった。ひとの一生にたとえれば時あたかも青年期で、いろいろの課題を意識しながらも、未来に対する希望と勇気を持つようになるときである。今日ではスポーツ科学の研究業績も着々と積み重ねられ、それが整理される段階にはいった。そして、スポーツの経験がスポーツの科学と結びつくとき、われわれのなかに大学体育に対する自覚と信念がはつきりと

芽ばえた。

教養課程と体育

大学に入学すると教養課程にはいるのだが、それは人生において十代と訣別する名残りの二年間である。大学では学生をおとなとしてとり扱うとよくいわれるが、それは大学生が既におとなであるということではない。われわれの形態や体力というものは、人間の形成過程で一番早く完成されるものであるが、このような身体的側面だけを考えても、この二年間の持つ教育的意義は非常に大きい。すなわち、教養課程の体育は身体形成期或いは鍛練期の最終の段階であり、個人が自分の肉体を発達させる最後の機会である。この時期には思春期のめざましい発育が一応おさまり、身体の外形はおおむね整い、第二次性徴もほぼ完成するので、はじめてエネルギーの余裕がたっぷりできる。そこで若い肉体の中に満ちあふれたたくましい力は、そのはげぐちを求めて新しい生活の探求にむかう。教養課程の体育には、まずこのすさまじいエネルギー発散の通路としての機能がある。われわれの仕事は、一万人を越える学生たち



(校外授業で燕岳に登る学生)

が激しく躍動する体育の場での交通整理からはじまる。それは受験体制にめつけられた学生の人間性の失地回復の一つの場として受けとらなければならない。いずれにしても、このような自然の摂理に導びかれて、若い人たちは自分の肉体的な最高能力に達しようとするのが教養課程における二年間であらう。

つぎに、大学の体育には高校体育と社会体育とを有機的に結びあわせる重要な機能が待っている。人生が身体活動を離れて考えられないと共に、人間の健康な状態も身体活動を離れて維持することはできない。われわれの労働を中心とした生活環境から、年令に応じた適度のはげしい身体活動がとり除かれたとすれば、それは他の形式のもの、スポーツでとり戻さねばならない。テクノロジーのめざましい発展、特に交通機関の進歩は、重い荷物を持って歩くようなわずらわしさをとり除いてくれたが、反面では、われわれに生物として要求される最少限の身体活動をも無くしてしまうかもしれない。このような環境では、自主的、自発的にスポーツすることの重要性は過去の尺度ではかることができない。

小学校から始められ、強制的な要素を持った体育は教養課程の二年間で終ってしまうが、それから先は、既に述べたような生活環境のなかで自発的にスポーツするという態度が個人をリードして、身体活動が継続されなければならない。もしわれわれがこの仕事に

失敗すれば、大学の後期には既に老化現象が現われ、やがて成人病がしのびよってくる。

自主的、自発的なスポーツが発展するには、理解だけでは十分でなく、技術の裏付けがなければならない。われわれは、たとい必要であることがわかっていても、不得意で自信のない作業はしたがない習性を持つからである。そこで大学の体育は、高校で紹介された各種のスポーツのなかから、得意なもの、好きなもの、一生続けられそうなものを選び、数は少なくても深い経験を積むことが第二の目標である。

さて最後に、教養課程の体育からスポーツによって人生をリクリエイトするという正しいスポーツ観が普及されなければならない。スポーツは生活からの逃避や退行の手段ではなく、それは新しい価値を創造する意欲とエネルギーを生むものである。今日では総ての子供たちが学校時代に義務的にスポーツと接触を持っている。また、四百万を越える人たちがなにかのスポーツ組織に入って運動を規則的に行なっている。更に、二千万以上の人々が個人的にスポーツすることに気ばらしを

求め、心身のバランスを見出してゐる。このような事実を正視するとき、スポーツは社会生活の中に孤立した存在ではなく、大学生活の中の遊離した存在でもないということがわかる。そうであれば、大衆のスポーツを繁榮させ、前進させる条件を考え、その前途に横たわる危険や障害を適確にとらえ、それを解決しようとする熱意と努力がなければならぬ。それは現在のスポーツ界の構造改革であるかもしれない。ここにおいて、大学の体育は発足当時の目標にあるような「規則的運動に導びき、体力を増進し、そのため競技をとるべき、その施設を充実にする」ということの形式的な追求に終始するだけでは十分でなく、更に一層視野を拡げ、体育やスポーツの本質に触れる必要がある。

教養課程において学生は、自己の身体の世界を知り、人類の歴史と運動文化の結びつきをたどり、進んで健康とスポーツと労働という三つの生活要素の深い関連を理解する必要がある。

スポーツが本質として持つ自由と規律は体育の貴重な素材で、これは大学という精神的雰囲気の中で完きを得るものと考えてるので、

われわれはマスプロの中でも、このような民主社会成立の精神的基盤を見失わないように

宗教々育について

基督教主義の教育機関においても、凡そ基督教的教育法などというものは存在しない。

それはあらゆる場合に適用される事柄であつて、この世と別扱いの基督教的研究態度というごく特殊化は存在してはならぬし、もし存在するとすれば危険である。現代は良い意味でも悪い意味でも世俗化した時代である。

ボンヘッファーをまたずとも (Bonhoeffer, *Widerstand und Ergebung*, 1959) われわれの現実は「大人になった世界」の中にあり、ルネサンス以来、自律的であることを学んできたわれわれ人間は、一切の重大問題を「神」の助けなしに解決する訓練を続け、その結果、

学生と接して行きたいと考えている。

(商学部教授・体育)

萩原 溢 恵

問題解決は「神」なしに行い、それでも結構うまくいっていると思つてゐる。この四世紀間、自己をホモ・サピエンスと名づけ、自己の榮光を楽しんできた人間は、たとえ神を否定しない場合でも、神に関する知識は人間に関する知識以外の何ものでもないとの人間主義、自然主義を盛んにし、また、人間は精神的、自律的存在であつて、意志的に理想に対応する自己展開を行う能力を有しており、その限り世界を己が故郷となし、人間自体を理想的作品として形成できるという自信を強めている。

現代人ないし現代社会はそうした人間の精

神的遺産であるが (Gogarten, *Verhängnis und Hoffnung der Neuzeit: Säkularisierung als theologisches Problem*, 1953) しかしこの人間が世界に対し、人間が主であり、自律的存在であることを知るためには、われにのみとらわれた自己ではなく、われのみを追求し、分析する思想でもなく、われと汝の間にある関係を出発点とする人間存在が、この世界を形造ることが (M. Buber, *Ich und Du*, 1923) あらためて考え直されるようになっていく。そして、この関係の中にある人間は、世界と対話することにおいてのみ本来の姿を保ちうるのであるが、世界に透徹することをやめる時、自らを規範とし、律法化する精神 (「イデオロギー」) に変化する危険をもつ。「聖書」などの場合、最も注意を要する点である。

*

女子大で私の担当する科目は「宗教学」とか「キリスト教学」とよばず「聖書」である。世間では何らかの形で「学」の字を附することによって、学問的価値と権威が裏付けられるかのごく思う者もあるが、伝統的に「聖書」としていることは、教師の興味によって

〈現場教授の意見〉

講義内容がすりかえられる危険をできるだけ警戒したいとの意識的努力なのである。担当者が少数であるため、多数の学生を受け持ち、大クラス制による不徹底を避けるため、一、二年次は百名以内の受講者に限定した分級を行っているから、一週間中同一講義を繰返さねばならぬこと、昨今は推薦入学から試験入学に変更されたので、官公立出身者が増加し、宗教に対する無関心、反抗心、或は誤解等に左右されている学生たちとの間に、基本的研究態度を作り出すのに相当の訓練と時間を要すること、たとえ高校においてキリスト教関係の知識を得ていたにしても、一般教育として必修の「聖書」を自発的に理解し、思考してゆくにはなお幾多の距離を感じている学生が多いこと、学生には各時期に興味が湧いても (二年次福音書・二年次パウロ書簡・三年次旧約聖書)、他学科目との関係もあって、更に研究してゆく場 (時間) がいないこと、学内における宗教・教育は教会生活へのつながりの面での問題を残していること、学生は高学年になって次第に自らの問題や専門に連関させて考える傾向がでているが、聖書、思想関係の課目は既に

選択外であるから、課外教科 (たとえば、修養会・キャンプ等々) や研究会への参加でそれを補おうとすること、一般教育においては、学問的な訓練のできる可能性がないこと (たとえばゼミナール等)、等々、さまざまな問題の中に埋没している感をまぬがれない。

大学は研究と教授が一貫し、学問と教育の自由が存在し、社会への責任を負うことに基本理念があるというフンボルト教授の古典的表現のどの点にも、現在の大学は非常な問題を感じさせられている。大学には研究と教育の自由があるが、研究者であることと教育家であることは、必ずしも一致しない。たとえば、私の分野に限っても、世界的レベルの神学者が良き牧者であるとはいえないし、良き牧者が必ずしも神学的に最高水準をゆくとも限らない。一般教育を受ける学生はいいつも初心者であるから、教授に際して教師は研究の方向から逆行して来なければならず、時を経るに従って、その間のずれが増大してゆくのである。更に、社会への責任という段になれば、全くその重さに圧倒されるばかりで、大学人はその点では、ほとんど無力―無能で

はないのかと思つてゐる。こうした内外の矛盾の中で、三年間聖書を担当してきたが、実は教育の面では、暗中模索の域を脱しておらず、いつも、新しい試みを開始し、いつも、新しい観点から見直そうとするために、当分の間、テキストも作れないし、教育法など特定な考えももてず、流動的(？)であることを免れない。しかし、そういう不安定の中で、却つて問題を理解しようとしてくる学生や、問題を提起する者が起り、非常に限定されているが、時間の許す範囲内で話し合うことができる。

*

一般に、専門教育重視の傾向は、ますます強化されている。それは、旧制の高等学校における教養を経て、大学において、専門に傾注したことに対する戦後の教育体制の変更に、中途半端な一般・専門両教育を生み、社会が大学に要望するものと、大学内の教育との間のずれが、一般教育への圧迫となつてゐること(自由「昭和四十一年七月号・八月号」『大学の病理』参照、大学自体にも社会を指導する理念が失われ勝ちで、社会の要求に従う傾向を強くしていることなどがあげられる。大学内

では、専門化、分化によつて、各学科は独立する傾向にあるから、他学科との連絡がとりにくく、総合大学としての姿は、内部において崩れているが、私個人として、学問的聖書研究のためには、可能な限り広範囲にわたる、他学科の専門家の研究発表等に、参与できる余裕をもちたい。これは学問が専門化するにつれて、学界においては高度の専門知識が要求され、研究も、ますます、細分化されるからであり、学生の要求は、教師の専門的研究分野と一致せず、といつて、学生に百科全書的知識の切り売りはすべきでないから、自ら調整しつつ、さまざまな危険、特に思想を失わせる傾向に鋭敏であり、他に聞くことができないければならないためである。どんな場合にも、学問するには、経験豊かな教師との出会と、きびしい訓練が必要であり、時代の新しい方向を示すことのできる見解をもち、自ら取り組んでいる学問を通じ、現実を、生気ある精神で解釈できる教師との出会が大切である。実際に学生と接していると、一般教育を二カ年に限定する理由はないし、一般教育も、場合によつては、ゼミナルをもつべきであらうと考えさせられる。現に、非常に少

数ではあるが、留年、或は、余分の聴講によつて、一般教育関係の講義を継続的に受けている者(専門の必要単位を故意にみたしていない者)もあるが、これは、女子の場合、いろいろむづかしい問題を含んでいるが、そうでもしなければ、学生も、自己の思想を形成する時間がないのは事実である。或る女子大学では「教養をつける」「学問探求」が相当高い比率を占めているが、一般的には、実社会や家庭で、直ちに有能であることが求められ、「肩書」「何となく」「将来の生活のため」というのが多い。それは何も、女子大学に限らぬことであらうが、実際には大学内に、一部の優秀な学生を含む大量の大衆的青年の増加の原因となつてゐる。諸大学は、収容能力の限界を越えているにもかかわらず、更に負担が増大している中で、教師は同一内容の講義の繰返しとか、莫大なレポートや答案の量を、どのようにして処理するのであろうか。聖書や思想に関しては、点数による評価の仕方は非常にむづかしい。カウンセリングと称する時間に、自己の問題を自ら考えず、他人である相談者からの解答を期待している者も多い。その他にも多くの相談事がある。教育の

責任は、「キリスト者」という肩書によって達せられず、諸種の制約を負いながら、学生や対人関係において、キリスト者であろうとして、全人的に対応する以外にないと思っているから、出来るだけ時間を割くが、この頃、急速に拡がりつつある諸宗教、思想の中には、熱狂的であると同時に、イデオロギー化し、こみ入った理論で、辻褄を合わせようとするものが多いので、対する側にも、巾の広い知識と、深い聖書解釈と、思想の歴史を前提にしていなければ、話し合ひは愚か指導もできないが、非常に長時間の対話と、その後の配慮とは欠かせない。現在の学生を、どの程度まで自律的存在と認め、指導すべきであり、どの問題まで取扱うべきであるか、わからないのであるが、できれば専門家を増やし、学生の諸問題を具体的に、徹底的に、処理する必要がある、その人たちに對する資格上、分担上の問題などにも、改革や熟考が必要である。学問上のみならず、沢山の人生問題までもちこまれてくるのは、それだけ欠陥や手ぬかりがあるのであろうが、とにかく教授の傍ら、相談に來たり、話かけてくる学生

△現場教授の意見▽

たちとの対話を通じて、個々に、具体的に、下宿生に對する配慮、寮制度に對する根本的な問題の検討、学内礼拝、研究会、修養会、キャンプ、クラブ活動等々への連関が、女子大における宗教々育の一環として、切実な問題を含んでいること、そして教職員が共に、それぞれの専門と独自性を通して、一致して教育に當るのでなければ、講義のみの宗教々育は不可能であることを痛感している。

＊

今までの宗教の受け入れ方は、文化活動の器としてであって、一般の人間関係を含む環境世界が、そのまま肯定されていたために、信仰としての宗教（キリスト教に對してこのことが可能かどうか、Bultmann, *Anknüpfung und Widerspruch*, 1964, in "Glauben und Verstehen" I を参照されたい）は問題外であり、現実の文化に對する批判、対決の態度を稀薄にしていた。特に社会や政治の問題に對する無関心、無責任は、強い底流として精神界を支配し、たとえそれらの問題がとりあげられたにしても、神に對する緊張関係からの挑戦ではなく、たえず部分的、相対的——というのは、人と人

との対面を重んずるところから出た反省であって、神以外に比較の原点があるから、裏を返せば、他への悪口と等しい一批判或は個人的欲求不満のはけ口となり、そういう人間の群衆行動の器でしかない。われわれ現代人にとって、「時間がその意義を失っている」という恐るべき状況の中で、各自が、神に對する緊張関係を回復するところに、解決の第一歩があるように思われる。その時はじめて、学校共同体、ひいては人間社会が、個物としての人間集合ではなくなり、亜流哲学——混合宗教、ニヒリズムの穴埋めのごとき熱狂的行動、各自の独善主義にも、はつきりとくるべき態度が知られるであろう。もしわれわれが、信仰を括弧に入れることしか出来ぬのであれば、「現実」と「信仰」は区別され、それは直ちに現実肯定とならう。キリスト者として生きようとする姿勢、神がわれわれに与え給うこの課題を、日本人として、現代人として、本気で果そうとするとともに、学問的対決と人間としての生き方とが、信仰の土着化として必然的に起るはずであり、さまざま人間関係、即自的社会関係のゆきづまりにも、突破

口が見出せるという希望の中に生活しているのであるが、多分、限界があるに違いない。

しかし、科学の発展に伴う人間精神への反省と、新しい精神時代への飛躍のために、人類が行っている諸種の模索と見透を通して、現在在は、（これはずっと後になって評価できることであろうが）人類の将来が分岐点となるような時点に近づきつつあることも否めないものである。「人身受け難し、されど既に受く」。信仰によって、自分を受け直す訓練をも含めて、「聖書」の時間をみたしているが（教育機構のいろいろな改革ももちろん緊急に必要ではあるが）究極的には、神の配慮を出ることの出来ぬ人間存在を、現実的には二者択一の可能性の中にあるごとくに考えている学生たちと共に歩んでいるのであって、誰か第三者が客観的に私の仕事を見、記述してくれる以外、本当のことは、自分自身にもわかっていないことばかりである。

（女子大学講師・聖書）

* * *

多くの種を播いておきたい

大 下 尚 一

私は歴史C（西洋史）を一年余り担当しているが、その経験は本学が履習要項に掲げている次の言葉にてらせば、貧しくかつ混乱に満ちている。一般教育科目は、「専門教育とたがいに相補的に、学生の知識と徳性を助成して、人間形成を達成するためにある」と。この経験から、今日の大学における一般教育課程について、人文科学系列の立場から現場に即した意見など述べることはできない。一年余の短期間に比して随分多くを経験したが、それらは現実可能なヴィジョンを生むには貧しく混乱していると告白せざるをえない。その責任はほとんど私自身に帰されるべきであるが、それを承知で、私の貧困な混乱した経験をやや一般的に考えてみよう。

私の経験は便宜的に三つに分けられる。書齋で講義の準備をする時、教室にいる時、教授会や委員会などの席にいる時であろう。第一は何を講義するかの問題であり、第二は如何に教えるかということである。第三は、第一と第二の問題が、大学全体の立場から受けとめられる、足場の問題である。私はこの三つとも貧しい経験しかえられず、この三つが本来しつかりと一体となる筈なのに、ばらばらに混乱してしまった。講義内容と教え方は、もちろん私個人が解決すべきではあるが、それだけなら、一般教育は経験豊かな教授が担当すべきだと繰り返しつつ、年のたつのを待つだけである。

そこで現状を仕方ないものとあきらめない

なら、第三の足場にしっかりと立って、第一、第二の重荷を担いで前に進みたい。毎週講義後に顔をあわせた、長年一般教育を担当して来られたK教授は、結局根本は学生の数でずよと言われた。この時経験ほど貧しく感じられたものはない。まさにその通り。一般教育は少人数で、専門は多人数でというのは、一般教育を日本にあわせて導入したアメリカでの常識である。しかしそれだけで進まぬならば、どうにもならぬではないか。ここで大学の危機は学生数にあるのではなく、数のことを真剣に取り上げなかったことにあるという、永井道雄氏の発言を思いだす。だが残念にも一般教育担当者にとって、大切な足場は、本学には存しない。存在していても、本気で足をかけたら落ちるかもしれない。これが第三の経験を貧困にしまった。

この原稿の依頼状には、「大学における一般教育」について、大学関係者の間で特に関心を持たれている」とあったが、私の経験では、すくなくとも公的には、本学の関係者は、編集者の言う大学関係者に入っていないのではないかと疑いたい。一般教育を担当するこ

とになった昨年、入試合格者発表直後、ある出版屋の主人が玄關先に座り込んだ。「わたしどもは、学校が見ているより定着数はずっと多いと思っているから、多数の学生を相手に教科書なしで講義するような無謀なまねはするな」と言うことであつた。もちろん彼は商売が目的だが、一般教育委員会や教授会を含めて、二時間以上も一般教育を論じられたのは、私の経験ではこのときだけであつた。

＊

問題を講義内容とその方法という第一と第二の点にもどさねばならない。西洋史に関するテキストを見ると、次の三つの特徴がある。通史を基本にしたもの、専門の人文科学・社会科学の史的研究への入門を意図したものの、現代に生きる者の自己認識としての歴史学の性格を強く打ちだしたものである。この三つの性格を、学生の関心に照らして考えてみるとどうなるか。私が本学の教養学部で学生であつたころは、専門をやがて決めるという自由と緊張をもって、一般教養の講義に出席できた。一般教育の長所が発揮できるには、その教育の中で専門を選ぶことが大切だと思

うが、それを言っても仕方ない。現在学生は、英文学の、電気工学の専攻生としての枠内で、一般教育を学ぶのだから、専門の史的研究への入門として、「歴史学は何か」を問わんとする意欲は稀薄である。将来、英文学をするのだから教養として西洋史の知識がほしいとか、自然科学を学ぶのだから教養としての歴史を知っていてもよいといった、教養派が多い。彼らの要求の多くは、通史が興味深く語られるなら満足させられる。しかし第三の性格たる、現実世界の成立を知り、自己の認識と実践への滋養としたいという要求が一番強い。これは今更言うまでもないことで、歴史学の課題もそこに存する。しかし、「現代社会の成立」を、単なる啓蒙的教養としてではなく、人文科学・社会科学の専門研究の成果をわかり易く説明しながら講義するということは、非常に困難である。このため、「近代化」「産業社会の成立」「近代文化から現代文化へ」といったテーマを、専攻や専門を異にする者が何人か共同して講義するという方法がとられる。本学でも可成り熱心にかかる可能性が研究され、議されながら流産した

そうである。私はこれが唯一の方法だとは思わないが、何人かの間に一緒に共同してみようかという意欲ができたとき、形式や制度の問題だけで行詰らしてはいけない。オーガナイザーが大変なら、増担を出したり持ち時間を少くするぐらいの配慮があつてよい。

*

一般教育担当者は経験の豊富な教授がよいという。しかし研究者としての経験だけでなく、多数の学生に面白く講義しうる者が一層好ましいのは当然である。学問や講義は面白いものではないというのも当然かもしれぬ。専門科目では、つまらないと思つていた講義が後になって非常に有益に感じられる場合がある。しかし、一般教育科目は一回きりの説切りの性質を強く帯びている。そこで一般教育担当者に適任者を得るためには、大学院手当があるように、一般教育担当者の中にも手当の対象になる場合があつてもよい。学外からの講師には、本当の適任者なら、講師料を何倍にしてもよいと思う。東京からでも来てもらつてよい。ハーヴァード大学にユニヴァシティ・プロフェッサーという制度があり、ティリヒのごとき世界的学者がその地位にあ

つたが、これは、専門の大学院の指導のためではなく、日本流に言えば一般教育の充実を目的にしたものである。日本のティリヒは、栄光館にあふれる学生に興味深く講義し、学生の学問への関心を昂めうるかもしれない。採点なら、その労が適当に評価されれば、私も何百枚かを担当してもよい。講義をする者が採点するというのは、世界の大学で譲れぬ理念になつていくわけでもない。

だからといってマスプロがよいなどと言うつもりはない。住谷総長が理事会室でアダム・スミスを数名の学生相手に講読しても、中世哲学者が研究室で一人の工学部の学生にラテン語の入門をしても、それは立派な一般教育の人文系列として認められてよい。これは科目の内容についてであるが、この点について、NHK教育放送の座談会（一九六六・三・九）は面白い。日本のリベラル・エデュケーションの唱導者前田陽一氏が、ライシヤワー、フランケル、ボートンといったアメリカの代表的大学人を前にして、日本ではすぐサンスクリットとか船舶工学などの専門になつてしまふという例をあげたら、ボートンは次のようにそれを受けている。「リベラルという言葉

の本来の意味には、人間を偏見と無知から解放するという意味があり、大学で医学や法律やサンスクリットが、偏見から解放するのなら、それがリベラル・エデュケーションです」と。

私の貧しい経験から描いた人文科学系列の一般教育の姿は、次のように混乱した夢になる。栄光館でA講師が「東西文化論」。神学館の研究室でY教授の「ヘブル語入門」。毎日曜、寺を廻りながらO教授とK教授の「美術」。そして、中教室では、何人かが共同して「近代から現代へ」という講義にとりくんでいる。半数以上の科目の講義は、従来通りである。「S教授が『わびすけ』で五人の学生を相手にゲーテを読むとのことだ。教室がないから、コピー代は一般教育の予算でどうにかしましょう。」こんな報告が、一般教育委員会でされる日があつてもよい。「一年間に数十頁ドイツ語を読んで単位をやるかつて？」私の貧しい経験の中には、M教授が授業補助者をわずらわせて一年間出席をとつたが、試験の結果は、得点と出席数が比例しなかったという話がある。一年間ヘブル語の初歩を学んだ学生は、西洋史のテキストを読めといわれなくとも、歴史の名著は必ず何冊か読む。「文

部省が許すかつて？」講義の題目は何とでも報告すればよい。学生向の看板より、役所向の看板は塗りがえがきく。「学内の統一が乱れるって?」「サンスクリットを講じて一般教育科目とする者は、……科目の主旨をわきまえ、一般教育委員長の信頼を裏切らない」と約束してもよい。学生との約束のように、今回限りという条件つきでもよい。

末期的症状とまで世に言われる現在の大学では、思いきってやれぬなら、やたらと機構をいじらずに、できるだけ多くの試みが、自発的にやれるようにすべきである。整地ができる日を待たずに、たとえ小さな種でも、できるだけ多く播かねばならない。洪水の後で何か芽を出す。

(文学部助教授・米田文化史)

「政治学」における実態と意見

小野 哲

一般科目の「政治学」は九クラスあって、私のクラスは常時三〇〇ほどの文・法・経・商・工の一年生が、静かに聴いています。「デ

ラゲラ笑ったり考えたりでノートを採るのを忘れました……」というウカツで素朴な答案もありましたが、一般的に言って、今年の四月から七月までの十一回の前期講義で、学生の政治的知見に漸く恰好がついて来たのが試

験の答案に現われています。そのサンプルのいくつかを紹介します。

私の「政治学」での前期の出題は四つ。その一は新聞の切抜き提出。他の三つは机上答案作製。答案用紙の配布と回収は学生同志ですませ、出題は黒板に書き出しました。第一問は教科書から、第二問はノートから、第三問は録音テープを聴かせてその所感。かなり

モリ沢山の試験で、一時間三十分は少し短かすぎたようでした。

第一問(教科書から出題) 答案例

「まことに申し訳ないが、不勉強のため、すぐにはとても書けませんでした……」(文科系の一年生)

「政治学を学問する場合には、社会史観や材料論は実際の基礎になるでしょう。私はこのようなことについては、まだよく分りません。しかし、それより一層根柢にある人生観なり世界観という言葉や図解に含まれている意味は、バク然とですが理解できます。これは人間一人一人が現実がこの世で生存し、生活するうちに生じた体験による教訓でしょう。……これにより政治も行われて来たのだと思います。この実践によって、その結果としての政治の理論——政治学が出来たのだと思います……」(工学部一年)

「……すなわち、政治学は良く生きるための体系化された知識でなければならぬ。その理論は、人間をして良く生きる方向へとむけるものであらねばならない……」(工・一)

「……にもかかわらず、我々の大部分は政治

に対して目を向けようとしな。なぜか。まさか直接に政治によって、苦しめられてはいからと樂觀的になつてゐるのではないだらう。……政治は理解の難しいもので、とても自分には分らないと信じ込んでゐるのではないか。もしそうであるなら、ここに初めて政治学が必要となるのではないでしようか。国民すべてに政治の真相を理解してもらう、はっきりと政治とは何かを知ってもらう、あらゆる国民すべてに政治というものを分かちやすく教える、その役目が政治学ではなからうか。僕はそう思います。まちがっているでしょうか」(法・一)

「このような政治を対象とする学問である以上、必ず理論通りに行つた実践が成功するとは言えない。また、理論だけ並べたてても始まらないのだ。実践が理論に先んじてゐるのだ。もともと政治学は、經驗的・體驗的学問なのだ……」(工・一)

「……政治は生活と離れては存在しないものである。例えば、事務室にいくと、大ていの人丁寧に取扱おうとはしない。丁寧にやつてゐるつもりかもしれないが、僕には、いや多く学生には、それが非常に高飛車に思える。

そのような政治には何のかかわりあひもないように見えることにも権力と結びつくような何かを感じるのである。これは僕の體驗で、政治と生活との結びつきを教えてくださいな例である」(経・一)

「理論と実践は、理想的な夫婦みたいなもので、妻(理論)は夫(実践)をよく理解して、陰からバック・アップすれば、夫は社会で立派な仕事ができる……」(経・一)

第二問(ノートから) 解答例

「ノートを取つていないし、授業にも余り出ずにいましたから書けません。どんな言訳をしても無駄ですからやめておきます。」(文・一)

「先生が京都府知事選挙の翌日お話し下さつた事。佐藤総理が、この知事選挙のためわざわざ東京から京都まで自民党の応援にやつて来て『二ナ川さんの顔には目が二つあるのかもしれないが私は見たことがない』と言つたことに對し、先生が一国の総理ともあろう人が子供のようなことを言うと言つておこつておられた。二ナ川知事が自民党で無いがゆえに、自民党政府は色々な妨害をする、そんなことは子供のケンカのような。二ナ川知事の

給与は市長の給与より少ない、これも……」(工・一)

「日本のおかれてゐる政治の状況——日本人の不良化(一億総不良化)不良の実例。あまりにもヤジ馬的。公共心が無い。(今出川カイワイの学生の横断の横着ぶり)。ヤクザ的な物ごしが大学生にもある。女子学生に猫のようなケモノの貌がふえてきた(岡潔)。大國の多くが核に専念してゐる。それ故に日本も核文明に汚されてゐる。ベトナム戦争をやめないアメリカの傘の内にある。人が人を殺すことを何とも思わないような権力のもとでは、良心はもち難くなる。国家間に隣人愛が欠ける(ソ連と中国、日本と中国、日本のためにアメリカは基地をつくつてゐるか。否。)良心を失つてゐる人は不良だ。しかし不良は直ちに悪党ではない。(身体の病はなおすのに年月がかかるが、心の病はその人の決心しだいで一瞬になおすことができる。)アメリカに抱かれてゐる日本は将来どうなるのか、アメリカを恐れず自らの手で、日本を押し進めていくべきである」(工・一)

「政治とは、いつからはじまつたのであらうか、先生のこの質問に對して、私は私なりに

一生懸命に考えてみた。でもそれは、まだはっきりと分らないのですが、一応結論らしきものを書きます」(法・一)

「政治学の実質について。A政治学をその周辺を含めて見る(広角レンズの政治学) B通例の政治学・政治理論ないし政治についての論理 Cトピックを選んで政治の実態にせま(望遠レンズの政治学) A B Cの使いわけが大切」(法・一)

「大学の講義の仕方は高校と全く違って……。人類の発生と共に政治が始ったか否か。原始時代の政治は？(宿題)政治と生活。国家がなければ政治がないというのは、単に国政がないというにすぎない。議会がないから政治がないとは当然言えぬ。いかに生き、さらに良く生きるべきか……人類発生以来の課題。現状の政治と生活。高度に制度化された政治。疎外・空洞」(経・一)

「宿題の米帝・美帝とは何か」の解答。

⑭反アメリカ的な風潮のある国(社会主義諸国のみではない)がアメリカの政治・文化、社会、経済のすべてに含まれているアメリカ的思想、アメリカ的政策アメリカ的外交を呼ん

〈現場教授の意見〉

だもの⑮イデオロギーの違いからくる政治体制の違いを、イデオロギーの相違を無視して政治体制そのものに名付けた呼び名⑯アメリカの外交的政治的侵略に何らかの型で影響を受けている諸国がかかっているスローガン⑰アメリカの繁栄に対する一種のジェラシーが政治的に高めたもの⑱アメリカ合衆国Ⅱアメリカ帝国(つまり国の名)(経・一)

第三問(ヒアリング・選挙運動を展開している政治宣伝カリーの録音を約一〇分間聴かせその所見を求める) 解答例

「増田真一氏が公明選挙に訴えて市長選挙に勝利を収めたとは仮定しても、はたして理想選挙や正義や政治理念が実際の政治力になって表われるか疑問である。中央集権に近い現在の地方政治の状況下で、中央にボス政治家が存在して……舞鶴の市民はそれで満足するだろうか……こう書きながら、僕自身増田氏の行動には賛成の一人である」(法・一)

「人間は一般に勇気のない動物です。だからだれかが勇気を出してやるまでは、ひっこんでいる。こういう人間の心理からして、国全体に対してしゃべるよりも、ある地域の人た

ちをガッチリ完成させる方が賢明で効果のある方法だと思えます。そうすることによって他の地域もやがてついてくる。そして国全体が公明な選挙を行うようになるだろう。結局、太平会の人たちは、こういう風に考えたのではないでしようか」(経・一)

「舞鶴市長選に真の意味の選挙をめざす団体が活動したことを知って、日本の政治の将来の糸口を見た様な気がする」(経・一)

等々。外に、更につつこんだ反社会的な論述もあつたし、権力や体制に対して、また世俗や現代に対して、絶望や怒りを表わす答案もありましたが、ここでは割愛します。ともかく各人各様まとまった解答が多数で、フザけた答案やいくじなしの答案は稀でした。

一般教育の問題点や、その理想、教養課程の役割について、女子の政治教育について、私も言いたいがヤマとあります。しかしいま私は「現場教授」としての意見を求められているにすぎません。そこで社会科学系列の一つ「政治学」の実態の場を、学生の試験解答を通じて紛飾なしに紹介してみました。

(法学部教授・政治学)

教養英語についての 問題点および提案

浜田 公一

編集部からあたえられたテーマは「教養課程（英語）に関する現場教授の意見」ということであるが、私は以下において現在、われわれ英語教員がかかえている主要な問題点二つをとりあげ、それに対する私の意見をのべたいのである。ただし、これから述べることは、あくまで私の個人的意見であって、英語教員全体の総意とか決定でないことをはじめにことわっておきたい。われわれの現在直面しているいくつかの問題のうち、(一)いわゆる再履修学生の問題 (二)教科運営に関する問題、の二点を考えてみることにする。

前者「再履修学生の問題」は昨今、学内に
おいて私ども英語関係者に対して種々意見の

ある問題である。私は本来は教養英語全般についての意見をのべるべきこの場所で、多少テーマからはずれることを知りながらも、これを第一にとりあげてみたいのである。同時にこの問題は教養英語全般と決して無関係でない重要課題でもある。後者「教科運営に関する問題」は教養英語における (1)「教科書の問題」(2)「教授法の問題」の二方面から英語の授業運営について私見をのべてみたいと思う。

再履修学生の問題

(1)語学教育の特殊性 語学の再履修学生の問題を考えるにあたって、私はまず語学教育

(とくに英語にかぎらない)の特殊性ということを取りあげたい。いうまでもなく語学の教室においては、毎週、出席をとること、教室において指名され、予習復習の有無が調査されること、この二点が大きな特徴であろう。さて、以上の二点が毎週学生たちに要求されるということは、語学教育は学生個々の日常生活をかなりの程度に規正し、束縛する結果になるのである。本来、大学においては、語学にかぎらずあらゆる講義科目も学生は毎週出席し、予習復習をしなければならないはずである。しかし、とくに語学の教室ではこの二つの必須条件が教授によって具体的に調査される。学生の欠欠、勤惰状態はきわめて明白に教授の目に映ずるわけである。このことを学生側からいえば、彼らの日常生活のうち、毎週幾時間かは確実に語学授業の勉強、出席のためにさかななければならないことを意味している。

(2)再履修学生になる原因 前述のことがとくに今日、大学における語学教育の特殊性であるというのは、一面において、他の講義科目が出席はとらないし、平常の勤惰状態は調査されないからである。

(演習その他若干の専門科目では出席をとり平常の勤惰状態を調査するが、これは専門科目であるから語学とは同一に論じられない)

再履修学生になるおもなる理由は私見であるが

(A) 右にのべた平常の出席、勤惰状態が極めて悪い場合

(B) 勉学の意志はあっても、教科内容が理解困難な場合

右の内(B)はさしあたって問題にならない、というより余程特殊な学生の場合である。何故なら英語は大学に入学する以前にすでに中学、高校と六年間勉強している。のみならず、入学試験という関門を彼らは通過しているのである。さらに、われわれはこのような諸条件を考慮に入れて、少くとも中下程度の語学力があり、勤勉であれば単位が取得できるようなテキストを選び、教科内容を実施しているのである。

(A)の平常の出席、勤惰状態のわるい学生が再履修学生の大半をしめしていると考えてよい(例外的に休学、その他特殊事情により単位を取得できなかった学生もいるが)。それで

△現場教授の意見▽

は何故に相当数の学生が大学において語学の出席がわるかったり、不勉強であったりするのだろうか。

その理由は

(a) 学生自身の自覚の問題

(b) 語学の一クラスの人員が多すぎて学生個々の指導がしにくい現実

以上の二点とおもわれる。つまり問題は学生自身の側と語学教室の現実という二方面にわたっている。

周知のように現在のような多人数教育の時代にあつては、大学に入学する学生のすべてが自覚をもち、良識ある学生生活をしているとはいきれない。多人数の中には不勉強な学生もいるわけである。しかし問題は大学のある種の科目は平常不勉強であっても試験の時に一夜漬の勉強で合格できる可能性があることである。大学における科目の性質が学生の怠慢を助長しているおそれがあるということである。思慮不十分な学生は語学に対してと同じ一夜漬の勉強でのぞみ、失敗するわけである。したがって、学生自身の自覚の問題といいながらも、実は今日の大学の制度自体

に原因はあるわけである。

語学の教室の人数が多数であることの弊害は単に授業能率がわるいという科目運営の問題もあるが、前述した不勉強な学生に対する叱責と監督が行きとどかない所にある。前述のような不勉強であつたり、語学に対する認識不足の学生に対しては、語学そのものを教えるより、彼らの人間性、心がまえから教育しなければならぬのである。語学のための日常生活の拘束性、規律性を当然である、というように、彼らの生活観の立直が必要である。語学が小人数であればよい、といわれるのは、そういう人間教育が可能だからである。

(3)再履修学生を減少する方法 しかれば、いかにすれば現在のような多数の再履修学生を減らすことができるかの問題である。このことを考える前提としては、前述のような諸原因の内、勉強したならば出来るのだが、自覚が足りないために不勉強な学生——ということとを念頭においておく必要がある。

(A) 語学が完全に取得できないものは、それに関連する専門科目が履修できない、とい

う規則をつくること（この場合、重要なことは、その専門科目がとれなければ自動的に卒業延期になるということである）。

(B) 語学教室を最大四十名程度とし、前述の不甘心な学生に対する人間教育を徹底すること。

(A)の方法は現実にある程度実施されているとき。しかし、問題は、たとえ一年ぐらい語学取得がおくれても、彼らの卒業には影響はない、という点にある。不勉強な学生を勉強さすには卒業がのびるという威嚇（かく）（これは決して望ましいことではないが）しか方法がないのである。もしこのような制度をつくることに對して学内に「語学の横暴」というような声がおければ、逆に、しからは現在のよう「勉強しない学生」は何が原因で出来たかを、反問したい。語学の教室は多人数の学生に對して、従来の少人数式の教育をかううじて維持している唯一の教育である、語学は少人数教室でしか効果がないのである。

(B)についてはわれわれ語学担当者は毎年、うったえている。しかし、私学として学生数の増加はやむを得ない、とすれば、逆に語学

担当教員の増加を要望したい（教員定員制のワクからはずすこと）。学生数は増加の一途をたどり、教員が現状のままでは、語学教育のゆきづまりが目に見えているのである。

教科運営に関する問題

以下にのべることは再履修学生を対称にした提案ではない。正常コースの学生の教科書とその教授法についてである。

(1)教科書の問題 教養英語においては一般に「小説」「論文」「随筆」「伝記」等が教科書として使用されている。私は多少の異論を予想した上で、右の各種教科書のうちで、とくに「論文」を主として使用することを提案したい。たとえば二年間の教養課程の期間中、かりに十篇のまとまった文章を読むとしたら、そのうち少くとも六篇は人文科学系の論文を読み、残りの四篇については「小説」または「随筆」とするのである。

文学作品を教養英語の教科書に使用することとは、ふるくからの習慣である。これは英語の教授たちのほとんどが英文学を研究している関係から、「文学作品こそ教養英語に最適である」という一種の迷信が生れただけのこ

とである。私は文学専攻の学生をのぞいて小説を教材とすることに疑問をもつ。文学作品は物語の筋とか人物とかいう表面的なものを通しての作者の思想、観念への接近、という二重構造をもっている。はたして幾人の教授が小説を教科書として使用した場合、作品の奥底にある形而上学的意味にまで言及しているだろうか。また、かりに言及しても幾人の学生が理解できるだろうか。

論文が教科書として適当な理由は、「英語の文章をとおして学生に論理的思考の習慣を身につけさせる」という点、つぎに学生個々の、その論文の主旨に對する反応を明確に知ることができる。この二点にある。前述の小説の場合、教授と学生間に明白に存在するのは小説の「筋」であり「人物」である。そういう筋、人物を濾過（ろくわ）して後に出てくる作者の思想を教授と学生との間の共有物にすることは、ほとんど不可能である。

(2)教授法の問題 つぎに教授法の問題である。これはすでに提案した論文形式の教科書を使用した場合を前提として考えてゆきたい。私は前述のごとく論文を教科書として使用するにより学生に論理的思考の習慣を

身につけさせ、担当教授との間にその論文のテーマを一つの客観的共有物として、学生の意見と教授の意見を対称化すること、また、学生同志の意見を対比し、その結果として、いずれの見方、評価がその論文のテーマになされるべきか、——このような教室での授業内容と目的を提案したい。

ここで当然問題となってくるのは、右のような内容主義的授業においては、語学教授が第一義的に果さねばならないといわれる役割割り、すなわち、発音の注意、文法的知識の確認、等の仕事である。しかし、私は発音の問題を講読のクラスで説明するのは不適當とみとめたい（もちろん、これは程度の問題で、あまりにも極端な誤りは訂正すべきである）。

つぎに文法的知識の問題であるが、これはあくまで、はじめにのべた内容的理解の補助物にすぎない。ここで私はわれわれ英語教員の間でよく議論される、部分的知識の集積と全体的意味理解の關係の問題について言及しておきたい。いわゆる「部分的に正確な知識がなくては全体の意味の理解は出来ない」とする考え方である。結論的にいって、

私は右の意見には賛成できない。むしろ逆に、部分的知識の欠如は全体的意味から帰納的におきなわれるべきで、そういう帰納的の理解力もまた、語学々習の一つの重要な要素とみるべきでなからうか。

教室において、もっぱら英文の訳注に教授がたずさわることはいたづらなる時間の浪費であり、また、訳注という機械的処理が出来ればその英文全体が理解しえた、という重大な錯覚をまねきやすいのである。この錯覚が重大であるのは学生の側にはなくて、教授自身が「訳のできる学生は内容も理解している」という考えにおちいる危険性が存在するからである。

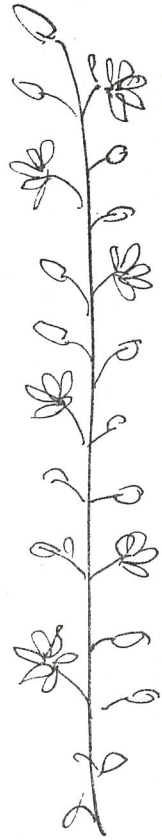
常に内容の理解に留意しながら、教室においては、とにかくにも分量を多く読ますことが重要である。この分量を多く読ますことが学生の読書力の増進の要点であり、同時に、前項でのべたような怠惰な学生への教科書を通じての無言の叱責になると考えるのである。

以上紙数の多くを再履修学生の問題について

やし、教養英語の教科運営については、まだ論すべきいくつかの問題を残した。しかし、いずれにしても、英語教授が現在の状況のもとでは甚だ困難であることがいくらかでものべ得たとすれば望外のことである。私の個人的意見ゆえ、思わざる不備、又はかたよった見方があるかも知れない。大方のご批判を得れば幸である。

（法学部教授・英語）





三つの対話

松本 仁 助

新進気鋭のドイツ語講師X氏の教室

X講師は、中級用のテキストを予定どおり進み、若干時間があまったので、学生に質問をもとめる。

学生A「先生〇行から〇行まで、もう一度訳してください。」

X講師「その箇所どころが、なぜわからないのか、まずいいたまえ。」

学生A「全体がわからないので、とにかく訳していただませんか。」

X講師「訳するのはわからないが、どこがどう

いうふうに君にわからないのかを僕が知らなければ、君にわからせるように説明できないじゃないか。君は予習してきたのですか。」

学生A「いいえ。」

X講師「それじゃわからないのも当然だ。だが僕は翻訳機械ではないから、訳はくりかえさない。訳だけを知りたいければ、友達にでも教えてもらったらいいだろう。」

学生A「不満そうな顔をして―「ハア……」

とたんに学生たちはざわめく。「きついなあノ」という声も聞えてくる。そのなかで一人の学生が発言する。

学生B「先生、それではあまりにも不親切です。先生はとにかく教えるのが職業なのですよ。」

X講師「そのとおり。だが僕は、いまは訳を拒否することによって、君やA君に学びかたを教えようとしているのだ。知識を獲得するのに、楽な近道はないのだよ……」

ここで、折良くか、折悪しくかわからないが、終業のベルがなる。X講師は、教室をでながら、アリストテレスが、ソフィストたちの教育法を非難して、彼らは出来合いの知識を与えているにすぎないのに、教育していると思いつこんでいるのだ、といった言葉を思いうかべる。彼は入思考の作業を他人の心に呼びおこすことこそ、教師のなすべき仕事なのだ。つめたいようだが、これでいいんだろう。自分でもいいきかせて去っていく。だが、肩をおとしてあるく彼の後姿には、入学間は苦しい。しかし入教えることはお難しい。という思いが、にじみでているようである。

ドイツ語Y助教授の研究室

学生のC君は、ドイツ語の初歩をおえただけだが、ドイツ語にとくに興味をもってお

り、自分で選んだ作品を一人で読んでいます。

Y助教授に、その作品のわからないところを質問している。

学生C「先生、このところがわからないのですが、教えていただけませんか。『この世では少数のものが、第三者にたいする共通の嫌悪と同様に、つよく結合させる』としか訳せないと思うのですが、なんのことかサッパリわからないのです。」

Y助教授「どれ見せてごらん。うむ文法的には間違っていないが、その訳しかたでは内容がわからないだろう。まず『結合させる』というのは、君も訳しているとおり、他動詞だから、目的語があり、それがこのドイツ語では省略されているわけだろう。なにが省略されていると思う？」

学生C「……」

Y助教授「『第三者』とあるのだから、それから推測して、『第一者』と『第二者』とにあたる人間が省略されていると思えばよいだろう。この場合それを簡単に『ひと』という言葉にしておきなうとよい。これで大体わかるだろうが、もっとはっきりさせるなら、君が

△現場教授の意見△

『少数』と訳している単語には、否定の気持ちも含めることができるのだから、それを強くあらわせばいいだろう。すると『この世では、ごくわずかなもののしか、第三者にたいする共通の嫌悪と同様に、ひとをつよく結合させない』、いいかえると『この世では、第三者にたいして抱く共通の嫌悪感ほど、ひとをつよく結びつけるものは、他にほとんどない』という意味になるのだよ。」

学生C「わかりました。だが文法的には正しいのに、意味を的確にとれないのでは、なさけなくります。」

Y助教授「なにもそうなさけなめることはないよ。僕らも君たちと同じ経験をしてきているのだ。たった二行のドイツ語を一日がかりで考えたすえ、やっとわかったということもあった。だが、このように文法を正しく駆使し、書かれたものの内容を苦勞して推論することにより、思考の訓練がおこなわれるのだよ。その際、君は、たとえ異なる言語であっても、人間であるかぎり理解できないことは書かれていないという自信をもつ必要がある一方、できるだけ自己を無にして相手の立場

にたち、相手のいわんとするところを理解しようとする必要はないだろう。またこのようにして得られた知識は、けっして忘れられないばかりか、確実に理解されて君の血肉となり、一般的な言葉でいえば、それだけ君の教養がたかまったということになるのだよ。そしてこのような知識でなければ、知れば知るほど、君は、その理解しない知識にふりまわされるか、その重さに抑圧されてしまうだろう。『理解なき力は自らの重みで滅ぶ』とホラティウスがいつているのは、このことだと思ふね。」

学生C「ありがとうございます。わからないところがありましたら、またお願いいたします。」

Y助教授「どうぞ。」

ドイツ語Z教授と一学生との立話

学生D「先生、僕はドイツ語は、実用的な面をやりたいのですが、そうすると読むほうが留守になるのじゃないかと心配なのです。」Z教授「たしかにそういう心配はあるね。日常会話の簡単ないいまわしでも、はじめはな

なかなか覚えにくいし、また覚えてもそれがすぐに読解の助けになるとは限らない。だからそれだけ会話の練習に時間をさかねばならないだろう。」

学生D「やはりそうですか。どちらかを重点的にやるよりほか仕方ないんですね。」

Z教授「いや、そう簡単にきめてしまったら困るよ。よく翻訳を重視する立場と、会話を重視する立場とが対立するようにいわれているが、それは、大学の教養課程の外国語として学習される場合、時間数の不足から、どちらかに専心するよりほか方法がないからなのだ。またいまの大学では、教養外国語というものを重んずるから、どうしても読解が中心になるのだよ。しかし君のように授業以外に会話をやるというのなら、話は別だよ。」

学生D「どう別なのですか。」

Z教授「僕は、はじめの間は会話を練習しても、読解の助けになるとは限らないといったね。それはそのとおりなのだ。だが読解力もつき、会話も上達してくると、会話の力が読解を助け、逆に読解力が会話の力をさらに強めてくれるのだよ。日常の簡単な会話なら、いいまわしをある程度覚えるだけで、自分の

意志を相手につたえ、また相手のいうことも理解できる。だが、この段階をすぎて、相手と混みいった問題を、つまり人生や文化のことを議論するとなると、読解によって得られる高度の語学力と広い知識とが必要になるのは当然だろう。また会話において、相手のいう複雑な内容を理解できるとなると、読解において、はやくしかも的確に書かれた内容を把握できるようになるのはいうまでもない。こうなると自然に聞く、読む、話す、書くという四能力の調和のとれた実力が養成できることになるのだよ。だから、君のように、授業以外に会話を時間をかけて習うのなら、どちらに重点をおくかということなど考えなくてよいだろう。」

学生D「よくわかりました。」

Z教授「もう一つつけくわえておきたいのは、実用面を専門にやっている人、つまり通訳や外交官なども、言葉以外に、いや言葉を通じてその国の教養を豊かに身につけていないと、立派な勤めははたせないということだよ。」

以上の三風景は、現在では、どこかの大学でも見られる風景といってよいだろう。三人の

先生は、異なった問題にそれぞれの姿勢で対応している。そしてこれらの問題は、一見何の関連もなさそうである。しかし大学が、その本来の機能においては、人間の精神を人間の精神として訓練する場所であるということを、そのためには自ら学び、自ら思考するという習性をまずつけねばならないことを、しかも思考の訓練には、ヘルムホルツもいっているように、語学と数学とが欠かすことのできない大きな役割をはたしているということを確認すれば、三人の先生の応答には、一貫性のあることが、見出せるだろう。X講師は自ら学び自ら思考することを、Y助教授は思考の訓練の重要性を、Z教授は実用面を生かすのも思考の訓練によって得られた教養であるということを強調しているのである。

世界がますます狭くなり、何事も国際的スケールでことがなされるようになった今日では、実用外国語の必要がさげばれている。だが筆者は、実用外国語の必要を痛感する故に、かえって深い意味での教養外国語の重要性を強調するのである。